

防波堤

山本 正次

敗戦後6年を顧みて、講和後の希望と覚悟を語る
1951年9月22日午前

敗戦を知った日、私は死を思った。しかし、死ねなかった。死ぬことは怖ろしかった。次には、教師を辞めるべきだと思った。今日の日まで私は生徒たちにうそばかりついてきた。「それは私のせいではない」という言い訳が出来ないことではなかった。だが、私は一度自分の口から出た言葉には、やはり責任を感じた。私自身が犯した罪悪を感じた。罪滅ぼしには、自らを追放して教師を辞める以外に方法はないと思った。けれど教師を辞められなかった。やめれば喰っていけないことが分かり切っていたからである。

こうして私は生き延びた。相変わらず先生と呼ばれる職に自分を置き続けてきた。だが、戦後一年あまりの間の私には、人間らしい生活の面影は全然なかった。ただ喰って眠っていたにすぎない。考えることを嫌った。考えようともせず、考える気力さえもなかった。その間に百人ほどの生徒に接したが名前も顔もまるで覚えていない。私は自分が教師であることも忘れてしまっていた。ただ痛烈に思い知らされたことは、己の間抜けさ加減、人間としてのお目出たさ加減であった。敗戦の土壇場まで戦争を〈聖戦〉と信じ〈神国日本〉を身体の芯のあたりで根強く肯定していた自分自信に対する痛罵の声が、常に暴風のように胸の中を吹き抜けていた。だまされたと他に対して怒る以前に、そのようなお人好しの自分が殴りつけてやりたいほどしゃくにさわった。

その私の眼前で歴史は転回して行く。めまぐるしい速度で。はじめ茫然とそれを見つめるのみでどうすることもできなかった私の内部に、やっと人間らしさが目覚めはじめてきた。私はやはり生きてかった。生活したかった。朝とともにやってくるその日その日に、はっきりとした生き甲斐を感じたかった。喰うことなくして人間は生きられるものではない、が同時に喰うことのみで生きてゆけるものではないことを私は体験した。仕事をやらねばならない。私は久しぶりに腹の底にかすかな情熱の灯の点ぜられるのを感じた。

それは、みるみる大きくなった。炎々として燃えだした。もうこれ以上現在に止まっていることは我慢できぬことを知った。その願いは〈生理的〉渴望に等しかった。私は私の周回をとりまいている環境が整えられるのを待っているだけの余裕を持たなかった。私はスタートを前に足搔いている〈競走馬〉にも似ていた。知人の反対を振り切って私はついに突進した。

あと三、四年にまでなっている恩給年限も棒に振ると、私は公職を退いた。私には十年二十年のちよりも、現在の生き方が問題であった。そのころの私というものを今も、私はいとおしみの眼をもって見ることができる。その時の、現在を生ききった自分にいささかの悔いも持っていない。

私は私立の高校に赴任した。敗戦を機として大きな断層に直面した民族の運命は、そのまま個人の生命の象徴でもあらねば

ならない。これが赴任に際しての私の決意であった。私は生まれ変わるべく決意した。私の頭の中から過去十余年の教師としての自らを抹殺すべく努力した。

〈新生〉、私の頭の中にあるものはこの二文字をおいて他にはなかった。私は夢中になって努めた。

先ず自己革命であった。教えるより先に如何にして新しき己を自らの内部に形作られるかが問題であった。それが、出来れば教師としての使命は半ば達せられたに等しいと思った。しかし、着手して程なく私はこの仕事の容易ならぬことを知った。三十年の歳月を費やしてこの五体にしみこんだ〈旧きもの〉のかけは思いがけぬしぶとさで、私の内部に根を張っていた。それは抜いても抜いてもなおはびころうとする雑草の強靱さを思わせるに似ていた。だが、私はひるまなかつた。

幸いに十日が昔の一年もの速さで変転していく社会情勢の流れがあった。それが、私に勇気を与えてくれた。「新しくなれ、新しくなれ」という励ましの声を日夜私は耳にすることが出来た。敗戦直後は、何もかもが価値の錯綜を起こしたような思いで茫然自失の状態にあった私が、遅蒔きながら、今やっと、本来あるべきものが、本来の真の姿に立ち返りつつあるといった感じで、すべての現象を見ることが出来るようになってきたのだった。

敗戦直後、私に襲いかかってきた虚脱感（それは単に私一人の

ものでなく、殆ど日本人には何れも同様のことがいえたのであろうが、どこからやってくるのかを今こそ私ははっきりとつかむことが出来た。それは、何物をも信頼することの出来ぬ空虚さから来たものであった。所謂人間とは何物かを心の支柱として、しっかりとそれにすがらねば生きてはいけぬものであった。

戦前、国民の大多数には日本という国家が心の拠り所であった。〈お国のため〉という言葉の前には誰もが一応、心の安定を得た。生活の苦しみに対してさえも、国家という言葉を考えることによって、これを切り抜けようという勇猛心を一応振り起こすことが出来た。「死」に直面しても「国家」の呪文は、これを征服し得るが如き思いを明らかにわれわれの内部に描いていた。

それは、国家主義者たちの描いた図なのであろう。しかし国民の大部分がそのように教育されて、ともかくもそれを生きていくための指標と信じ続けてきたのであった。それが、敗戦とともに一挙に崩壊した。

あれほどわれわれがもっとも崇高な対象として仰ぎ続けてきた〈国家〉観念像は、幻の如く消え去った。しかも、引き続いて次々と暴露せられた、いわゆる〈真相〉に、われわれはわれわれが今まで全信頼をかけてきたものの、虚偽であることを知った。すべてが偽りの世界であった。すべてが誤りの道であった。これほどまでに生命をかけて信じ続けてきたものに、一

片の真実さえもなかったのである。

一体、他の何に真実を期待できるというのか。他の人は知らない。しかし、少なくとも私にはそうであった。その私にとって虚脱の道しかなかったことは、こうして考えるとむしろ当然のことであったのではあるまいか。

だが、しかし人間は哀しいものである。私はやはり何かを信じねばならなかった。そうでなければ生きていけぬ自分であることをはっきり知った。その私の前をいろいろなものが、通り過ぎる。共産主義が通る。虚無主義が通る。刹那主義が通る。便乗主義が通る。

しかし、私は今度はもうあわてなかった。私の目はじっと自分を見つめ続けていた。それは、一年半の虚脱状態の苦しみの中であって、私はこの世においてただ一つ頼りになるものを、しばらく探り得ていたからであった。他のものは、いずれも当てにはならない。いかに真実らしい顔をしていてもダメだ。けれどこれは、これだけは大丈夫だ。絶対に裏切られることはない。

それは〈自分〉であった。〈自分〉こそがこの人生においてもっとも信頼し得る唯一のものであることを、私は見いだすことができたのだ。私は自分を見つめて生き続けていこうと思った。私という個に徹しようと考えた。個人主義というものを、もう一度本気になって勉強してみなければならないと思っ

た。本を読んだ。人の話を聞いた。

しかし、今度はその本を読み、その話を聞いている自分を注視し続けている〈自ら〉をはっきりと意識していた。私は決して何者をも頭から信じようとはしなくなっていた。まず、疑ってみた。そうすることによって、私は自らの内部に確かな批判の精神を築き上げてゆこうとしたのであった。その意味で私は何よりも自分を大切にせねばならぬことをも悟った。

そのような生き方を始めた私にとって、戦後の自由に満ちあふれた世界は実にありがたかった。たとえそれが、与えられたものであったにしたところで、言論の自由というものの底には、思考の自由という大きな世界が拓けて行くことを知った。この世界に出て初めて人間の思考作用さえもが、外部からの圧迫によってその自由性を束縛されるものであることを知っておどろいた。私はこの自由こそ人間に与えられた真実であることを、はっきりと悟ることができた。私の生きてきた三十年の生命が、いかにこの自由から遠かったかと思うとき、そのような自分が限りなくいとおしまれた。

さらに、私は私の自由を思うと同時に、私と同じものを持つ他の個人の自由を当然思わざるを得なかった。そして、そこに築きあげられた世界像が、「デモクラシー」というものであることを知った。

私は私という人間が、この「デモクラシー」を知るためには

三十年という時間を要するものであったこと、さらに惨憺たる敗戦という現実直面せねばならなかったということ、すべて運命の必然として解釈したい。私という人間が育つためには、どうしてもそのようなコースを必要としたのだと信じたい。今、やっと私は私の在るべき位置にたどり着いたのである。私の人生は、今にして始まったのだと言ってよい。

その私の前に繰り広げられたものの一つが、新しい日本国憲法であった。私は今もあの朝の輝かしい気分をはっきりと胸中に思い起こすことができる。そこには「他の何物を持ってしても犯されることのない個人の尊厳」と書かれてあった。「永遠の戦争放棄」の宣言が高らかに謳われてあった。自由と平和に満ちた明るいおおらかな構想が天空を限ってわれわれのあるべき世界を描いて余すところがなかった。現実にある世界は、その描かれたものとはほど遠い。しかし、〈かく在るべきもの〉として示されたその理想像の崇高性が強く私たちの胸を打った。目指して進むにふさわしい目標であった。

われわれはこの〈自由と平和〉を目指すことによって、しばらく現実の労苦に克ち得るであろう自信を得たかに思われた。一部には、これを評して「与えられた憲法である」とし、「日本人の作った憲法」でないことに不満の意を表しているものもいると聞いた。しかし、私はたとえ「与えられた」ものであったところで、それが人間の真実を表するものであり、限りない

善意のあらわれであれば、何ら問題はないのではいか
—— と思った。

与えられたものであろうが、何であらうが正しいものは正しいのであり、間違っただけは間違っただけなのだ。そこにはいったい何物にとられる必要があるというのか。そんなことを論議する以前にわれわれが為さねばならぬことは、如何にしてこのよきものを自らのものとしてはぐくみ育てていくのかの問題なのである。

しかし、今にして思えば、そのころから私たちの周囲には、「どうしても率直にもものを見ようとする目を、自らのものとなし得ない一群の人々」が、「本能的に〈旧きもの〉への執着を断ち切れぬ人々の群」が、頭をもたげつつあったのである。私は彼らを憎む。私はなんとしても彼らと妥協することが出来ない。それは自己を売ることになるからだ。私は今度こそもう自己を売りたくはない。

戦後、時の経つにつれて人心は落ち着き、生活程度もようやく戦前のレベルにまで達したとの声を私たちは耳にする。勿論喜ばしいことには違いない。戦後の荒廃から立ち上がってゆく社会の姿を目にすることは、確かに頼もしい。けれど私は、そこに一片の不安を感ずる。本能的に〈旧きもの〉への郷愁を断ち切り得ない一群のうごめきをしきりに感ずるが故である。彼らは決まったようにいわゆる戦後派分子を攻撃する。彼等に

あつては、アプレゲール(戦後派)は手の着けられぬならず者と同意語である。自分たちと同じような人間らしい(と彼等は信じ込んでしまっている)訓練を受けずに、途方もなく背丈だけ伸びてしまった無頼漢と見る。彼等は二言目には、「今の若い者は仕方がない!」とつぶやく。戦後の犯罪、社会的混乱の因って来るところはすべてこの戦後派にあるとして片づけてしまう。

しかし、私はそのような彼等に反問したいのだ。君らのどこにいったい現在の戦後派を批難しえるだけの資格があるのだと。一応君たちの言うことを黙認してアプレゲールの非を認めよう。だがいったいそのような彼等を生み出した母胎は何だ。戦争ではないか。敗戦云々以前に、先ず戦争を起こした事実そのものではないか。その戦争責任者は戦犯だけか。いさぎよくお互い本音を吐こう。そしたら、君も日本の大人全部が責任者だといわざるを得ないだろう。

その君がどうして「今の若い者は・・・」などという口が利ける。傲慢も甚だしい。しかも君たちは、本能的に新しく生きようとするものへの嫌悪を捨て得ない。新しさということ、そのものに根拠のない反感を示そうとする。二言目には「日本人は——」という言葉が口から飛び出そうとする。振り返ってみるがいい。君たちの背後にはまだ国家主義の尻尾の切れ端がついていないか。君たちには今でも戦前の日本人の体臭がつきま

とっていないか。私は年齢から言えば、勿論戦前派に属する。だが私自身は戦後派をもって自認している。敗戦を機として、生まれ変わろうとつとめ続けてきた点でこのことは認められてもよいと思っている。自惚れといわれても良い。あらゆる日本人が、全部私のような自己の切り替えを試みての努力を現在まで継続し続けてきていたならば、われわれの社会は今少し清新の気に満ちた前進の見通しをたて得られたのではないか。

敗戦は確かに大手術ではあった。化膿しきっていた腫れ物は大きく切開された。その中からどろどろの血膿が悪臭を放って流れ出た。われわれは耐え難いまでの苦痛を感じた。だが一方、それまで全身を覆っていた覆い被さる不快感を拭い去られた。あとは切開の傷跡の癒えるのを待てばよかった。われわれはまったく一新したはつらつたる健康体を夢見て、手術の苦しみを堪え忍んで来た。

けれど、何ということか。まだ化膿菌は残っていたのだ。手術は徹底性を欠いていた。うすかわを張った傷跡の下に、もうその新しい病根の繁殖が見られるではないか！ 傷跡は日に日に回復しつつある。われわれは健康体を取り戻しつつあるかに見える。しかし、果たしてそれが本当のものかどうか。新しい化膿はないだろうか。もしあるとすれば、それが敗戦という大手術を効なきものにしてしまうのではないか。

これは余りにも主観に過ぎた言い分であるかもしれない。し

かし、私ははっきりと表明したい。恐るべく憎むべきは戦後派にあらず、旧きものへの肯定を捨て切れぬ観念論の持ち主であると。

講和条約調印の日が来て、町には日の丸がひるがえった。日本はともかく独立国として認められたのである。講和会議の議場に飾られた連合国の国旗の五十二本目に日章旗が立てられたという。ラジオの中継放送でそれを聞いて感慨無量、万感胸に迫ったという人もある。しかし、私是一向にそのような気持ちはなれなかった。国民的感動というものを失ってしまった故であるとも言えるかも知れない。

けれど、それよって来るものは私自身には、はっきりしている。それは自らの内部に萌しつつある不安の念に他ならない。国際情勢に対する不安もある。しかしそれ以前に更に切実な今まで述べてきたような、われわれのお互いの間に見られる傾向に対する大きな不安なのである。

「なあに、今に講話がすめば世の中はまた変わりますよ」

何度、私はこの言葉を耳にしたことであろう。そして、その度にどれほど烈しい憤りに燃えたことであろう。そこには、この六年間のわれわれの歩みを全然無視しようとするものがある。そこに、いささかの価値すら認めようとしていないのである。〈新生日本〉もお芝居であれば、『日本国憲法』もおざりの言い訳に過ぎない。真実はいささかもなかったのだ。みんな

占領下における申し訳に過ぎない。いよいよこれからが、自分たちの本舞台であるといわんばかりの口振りである。

戦後今までのわれわれの生活は全部嘘であったのか。自由も、人間の民主化も、人権の尊重も、単なるお題目に過ぎなかったのか。そんな馬鹿なことが一体あってよいのか。

われわれは戦争によってすべてを失った。けれど絶望の底からわれわれは最後に信頼できるものをつかんでようやく立ち上がることが出来た。〈デモクラシー〉の精神こそ、それであった。もしこれが今までと同じ繰り返しのお芝居に過ぎないのであったとしたら、一体私たちはどうなるのだ。もう絶対にわれわれは救われることはない底のない絶望の中に投げ込まれてしまうであろう。〈本来の日本人の姿〉——一体そんなものがなおわれわれの裡に存在するのだろうか。それは敗戦とともに、滅んでしまっている筈ではなかったか。

もし存在するとしたら、それは亡霊である。〈日本人らしきは、あくまで〈新しさ〉の、それでなければならぬ。われわれの現実切実にそれを要求している。焼け跡の中から拾い集めた煉瓦で、私たちは新しいわが家を作ろうとは思わない。一切の断絶の後にのみ真の〈新生〉を期待することが出来るのだ。

しかしながら現実には、私は私の周囲に〈旧きもの〉への復帰を指向する空気を日毎に感ずる。しかも今後その波の強さと広

がりの拡大は予想して余りがある。生徒達の家庭に、学校に、社会の各職場に、そして国の政治の面に滔々として押し寄せる潮騒をはっきりと聞くことが出来る。そしてこのことは、自ら考える力を持たず、また依然として持とうと努めることをしなかったわれわれ日本人にとっては看過し得ぬ問題である。再び、あの悪夢がわれわれの上にやってこないと誰が断言できよう。真実が覆われて、誰も彼もが自己を売って省みなくなる時代が到来しないと言い切れることがどうして出来よう。

私は防波堤になろう。いや、ならねばならない。そこに私の生きる意味を見いだして行こう。私の若い生徒達を、私の胸の裡に抱いて、押し寄せる波浪から守り抜いてやらねばならない。

私は彼等を愛しているからだ。彼等の生命を愛するが故に、私は彼等の自由を守り通すのだ。私は防波堤の底の一つの石だ。私と共に手をつないでくれる同志も絶無ではあるまい。

そしてやがて私の胸の中の生徒達が、この私たちの上にしっかり立ち上がって、この国の本当の姿を描き出してくれる日のあることを念じ続けて行こうと思うのである。

「防波堤」を復刻して

水口民夫

この「防波堤」という文章は、仮説実験授業研究会の会員であった故・山本正次さんが書かれたものです。若い人の中には、山本さんのことを知らない人もいると思いますが、仮説のみならず「国語教育」の大家というイメージがぼくにはあります。

今回復刻した「防波堤」の文は、2001年に池田基博さんによってつくられたガリ本『防波堤』（はるな書房）をPDFデータで取り込んで、それをワードのデータに変換して作成しました。もとのガリ本を作られた池田夫妻とこの作成のやり方を教えていただいた井藤伸比古さんに感謝します。

ぼくは、四條畷学園小学校でかつておこなわれていた仮説の「公開研究授業&研究会」に何度も参加していました。そのときの山本さんの国語の授業は何回も参観させていただきました。なんとも言えないゆっくりとしたやさしい語り口は、今でも耳の奥に残っています。山本さんはたくさんの「国語の授業プラン」を作られています。ぼくも小学校に勤めていた時は、「モンシロチョウのなぞ」「ふんすい」「おおかみ」などというプランを使わせてもらいました。仮説の方法をとり入れた予想しながら学ぶのいいものでした。

2023年は、山本正次さんの生誕110年目の年にあたります。

(2023.4.17)